

2017.9.1
発行



代表取締役社長

お お ぞ の け い い ち ろ う 大園 圭一郎

関

東を中心にチルド・フローズン食品の輸送を手がける南日本運輸倉庫株式会社を率いるのは、代表取締役社長、大園圭一郎である。2014年に、創業社長である父からバトンを受け取り、現在、社内制度などの改革を進めている大園は、子どもの頃から次期経営者としての自覚を胸に成長してきた。

家業の手伝いは 小学生の頃から

東京都板橋区の高島平で生まれ育った大園は、小学4年生の頃から営業所の手伝いをしていた。主に力仕事で、営業所の倉庫にある大きなカゴ車で荷物を運んでいたという。南日本運輸倉庫では引越越し業も行っていたため、その繁忙期の3月や、コンビニエンスストア用アイスの配送が立て込む夏休みは、ほぼ毎

日駆り出されていた。

中学時代の父との思い出

中学に進学後、大園はゴルフを始め、父の関係先の接待にも同行した。父は帰宅すると大園の部屋を訪れ、会社での出来事などを話すようになる。父が熱心に仕事の話をしてくれるのが、大園にとってはとても嬉しかった。両親が共働きだったため、家族で過ごせる時間は少なかったが、寂しい思いをすることはなかったという。短い会話でも、自分に対する父の信頼は十分伝わっていた。

とある企業が民事再生した際には、18歳だった大園も債権者会議に出席し、マイクを握り経営者を追及する父の姿を間近に見た。そうした機会を経験することで、会社を運営することの大変さや厳しさを、大園は肌で感じたという。

父の背中を見つめるうちに「自分が父の会社を継ぐんだ」という意識が、大園の中に自然に芽生えていった。

後継者として 南日本運輸倉庫へ

高校はゴルフの推薦を受け、スポーツで有名な埼玉栄高等学校に進学し、卒業後、拓殖大学に入学。大学卒業後は、南日本運輸倉庫の取引先の子会社である宅配ピザ店に就職した。すると、前任の店長が早々と別店舗へ異動になり、大園は経験が浅いまま店長を任されることになってしまう。

不安の中でスタートした店長業務だったが、従業員への指示や売り上げの管理など、試行錯誤しながらもかろうじて仕事を軌道に乗せることができた。子どもの頃から父との会話を通して経営感覚を養ってきたことが功を奏した。

宅配ピザの店長となって2年後、父が椎間板ヘルニアと診断さ

れる。

「戻ってきてほしい」と連絡が入ったのを機に、大園は南日本運輸倉庫へ入社した。

当初は、父から指示された仕事をこなすことに専念していた大園だが、のちに1人で任された現場の立ち上げでは、様々なことを予測して準備を行う大変さを経験した。お客様から「君に頼んでよかった」と言ってもらえた時の嬉しさは忘れることができない。

その後は、父と役員とのパイプ役などを通して、南日本運輸倉庫の経営について勉強していった。

失った自信を 取り戻したきっかけ

大園は役員に就任したが、現場での経験の浅さから今一つ自信を持つことができていなかった。自分の役割を見出せず、周囲からの厳しい視線も気になり、苦しかった。そんな時、物流部門の部長が「勉強会をやりましょう」と声をかけてくれた

という。年下の大園を、部長は励まし、勇気づけてくれた。

「あの時、声をかけてくれる人がいたからこそ、『自分がやらなきゃ』という気持ちになった」。

自信を取り戻すきっかけをくれたことに対する感謝の気持ちは、今も抱き続けているという。

大園が社長として父と同じステージに立つためには、何か一つでも父に勝るものを得て、さらに自信をつける必要があった。そうでなければ、いつか父が経営から離れ、自分が指揮を執ることになった時、戸惑いが出てしまうと考えていた。

問題の解決力に関しては、父に勝てるとは思えない。それならば、せめて問題をキャッチするスピードだけは負けまい、と心に決めた。常に先回りして問題を発見し、対応する。「父よりも先に気づき、対処した」という経験を繰り返すうちに、大園は徐々に自信を持てるようになっていった。身につけた「スピード重視」の考え方は、大園が社長に就任してからも大事にしてい

ることの一つだ。

父から経営を引き継いだ大園は、南日本運輸倉庫を大きく変えていくことになる。



企業情報

- ◆ 創 立 年 : 1975 年
(昭和 50 年)
- ◆ 年 商 : 200 億円
- ◆ 従業員数 : 1200 名